

＜春の微かな足音＞1月下旬は一年でとりわけ寒い“大寒”です。春先のような暖かい日もありましたが暦の通り霜柱と氷の朝がほとんどでした。淡雪の朝にはフキノトウ（露の臺）を見つけました。昔の暦72候では“露の華咲く”候で寒さの中に春の微かな足音の聴こえてくる時期なのですね。

＜露の華咲く＞旧暦72候中の70番目で1月20日から5日ほどにあたります。“款冬華”と書き、款冬(かんとう)はフキのことです。



＜露の臺と枯れ葉に残った淡雪＞

＜カモちがい＞このところ池にはカルガモのカップルに加えてマガモのカップルも来ています。カルガモの方が人の気配に敏感で大慌てで飛び立ちます。マガモは幾分おっとりしていてカルガモが水を蹴って飛び出した後を「なに、なに、何があったの?」といった風情で二羽とも振り返って見ていま



＜振り返るマガモ＞

＜飛び立つカルガモ＞



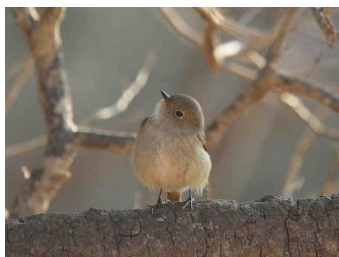
＜マガモ(♂、右)とカルガモ(♀)＞

す(右上写真)。ところで下流の遊水池からマガモとカルガモが飛び立つところを撮られた写真を紹介します(撮影：中浜精一東工大名誉教授)。実にダイナミックですね。またカルガモが目立たないところでお洒落をしているのが分かります。



＜コゲラ＞

＜楽園＞ビオトープの周りの林にはいろいろな小鳥が訪れています。同じく中浜氏の撮られた写真でコゲラその他ビンズイとジョウビタキを紹介します。冬枯れの枝に留まって“むくむく”としている姿は何とも言えず可愛らしいですね。これらの小鳥の名は鳴き声の“聞きなし”からと



＜ジョウビタキ(♀幼鳥)＞

のことです。ビンズイは“ビンビンツイツイ”と鳴くためだそうです。しかし早口のさえずりはそんな風には聴こえません。ジョウビタキは火打石を



＜ビンズイ＞

打つ“カッカッ”に似た鳴き声から“火焚き”、そして“ジョウ”は頭の毛色を白髪に見立てた尉(ジョウ、翁のこと)からと言われます。それにしても“聞きなし”というのはよく考えた人がいると思う一方、何とも大変なものです。ウグイスの“ホーホケキョウ”はまず良しとして、たとえばヒバリの聞きなし“日一分、日一分、利取る、月二朱、月二朱”は強欲高利貸しのように当人(?)にはさぞかし不本意なことでしょう。

(文と写真：松本正勝)